

白花百合子は、もう二十二歳になる。福岡県福岡市内中央区にある不動産会社に勤めるOLだ。身長 160 センチ、体重 60 キロ。スリーサイズは、上から 86>58>88 という極め付きの体は洋服を着てもハッキリとそのふくらみが見えるものだ。顔はすこぶる美人で、博多美人というおもむきだ。という彼女だが、彼氏はいない。

彼がない理由の一つは、職業によるものだろう。不動産会社は日曜も仕事がある。

最近の世相では、女性で二十二歳で独身というのは別に珍しくもなくなっている。

だから、もう二十二歳という表現は当節不自然だが白花百合子としては普通の女性よりも結婚願望が強いので、彼女の気持ちとしては、もう、という気持ちなのだ。

彼がないもう一つの理由として考えられるのは、彼女は

女子中学、女子高と福岡市内にある私立の学校に通わされた事にあるだろう。

おまけに女子中、高と空手部に在籍していたので、これも男がない理由かもしれない。つまり、白花百合子には隙がないということだ。

以前、二十歳の頃、通勤している地下鉄で朝、彼女は痴漢に会いかけた。彼女の豊満な尻に触ろうとした若者の手をハイヒールを履いた片足で蹴り上げて、その二十代の学生は手にひびが入る怪我を負った。激痛にしゃがみこむ、そのやせた男を見おろすと百合子は、

(わたしは、ちゃんと見てたんだからね。あんたの右手の動きを。)

と心の中で言い捨てた。

さすがにその件は、百合子も幾分気の毒に思えたので彼女

は美容院で髪の毛を短くしてもらった。椅子に座ると、

「スポーツ刈っていいのか、あれにしてください。」

「ええっ、男の子？のようにですか？」

「ええ。その方がいいかと思って。」

「わかりました。」

それで百合子の頭は男子のように、短髪になった。会社に行くとき課長が驚いて、

「白花君。びっくりするな。でも、似合うよ。不動産会社勤めには、それでいいと思うよ。」

「ええ。変な男がいましたから。」

「ああ、客の中にはたまにそんなのもいるだろうね。その髪型だったら安全だろうな。」

百合子は詳しくは答えずに、

「そう思います。これでお部屋の案内も、もっと多くでき

ますわ。」

百合子は男性経験は、なかったが処女ではなかった。百合子の処女を奪ったのは、彼女が通う空手道場の女師範、六月（むつき）さね子だった。それは百合子が十八の歳で、女子高の夏休みに夜、いつものようにその道場で稽古を終えた後に六月さね子は寄って来ると、

「女らしくなったわね。わたしが空手の秘儀を教えるのに、ちょうどいいな。」

と耳打ちした。六月は三十歳だ。空手歴も長いし、手には拳ダコがあり肩幅も広い。胸は小さく、しかし尻は大きかった。眼は細長く、鼻は高い。百合子のようにパッチリと開いて、二重まぶたの瞳とは正反対で六月さね子の眼は一重だ。さね子は、その空手道場の館長の六月武郎の一人娘

なのだ。まだ、独身である。その時、道場のみんなは既に
いなくなっていた。さね子は洋服に着替えると、

「その技を身につける前に、百合子が経験しなければ行け
ない事があるの。それは、シティホテルでね。」

「おす。わかりました。」

「わたし達、メスだからめす、って言ってもいいわよ。っ
て冗談よ。行きましょうか。」

茶色の服を着た百合子を六月女師範は、促した。

その空手道場は福岡市南区井尻にある。百合子の両親は東
区香椎の辺りに住んでいて、百合子も小学校卒業までは東
区で育ったのだが、私立の女子中学に通うのは大変なので、
その学校に近い駅の井尻のマンションに百合子は一人暮ら
しだった。その井尻の駅近くにある空手道場、練心館こそ
百合子が中学入学と同時に通い始めた道場なのだ。百合子

は中学でも空手部に入った。その練習が終わると練心館道場に通う。

おかげで高校三年の夏に百合子は、女子空手日本一になった。

（六月師範も、わたしに期待してるんだわ）百合子は、これから始まる師範の指導に心をときめかせた。

井尻にはホテルはないので、一つ北に行った大橋駅近くのシティホテルに二人は入った。六月女師範は片手に大きな黒いバッグを持っていた。部屋に入ると、そこはシングルでベッドは一つだ。フロントの三十代の男性は変な顔をしていたっけ。と百合子は思い出す。さね子は、

「泊らないし、これでいいのよ。さあ、裸になって。」

と指示する。ええっ？裸にいつ？百合子がそう思ってボンヤリしていると、目の前の女師範はスルスルと洋服から下

着まですべて脱いで全裸になった。筋骨逞しいといってい
いような体に、小さな胸と黒々とした足の付け根のアンダ
ーヘアが百合子の眼に入った。百合子も急いで裸になる。
高校生にしては発育した胸と尻が女師範の眼に入ると、

「百合子、いい体しているわね。これから貴女が習う秘儀
は男に使うものだけど、その前にあなたがやらなければい
けないことはね。」

師範は飛ぶより早く全裸の百合子、その頃は少し長めの髪
の毛の百合子に近づくと彼女の肩を抱いてキスをした。初
めて触れる女性のくちびるの甘みに百合子は、ぼーっとな
った。そのまま、さね子は百合子の口を自分の舌で開ける
と十八の百合子の舌にくによくによと舌を絡めていく。さ
ね子の左手は百合子の右胸を優しく揉み始めていた。(ああ
っ、師範はレスだったんだあっ・・・)と揉みしだかれる胸か

らくる快感を感じながら百合子は思った。さね子は自分のアンダーヘアを百合子の同じ部分に当てると、腰を左右に振って擦りつけた。百合子は自分のその部分が濡れてくるのを感じた。さね子は舌を抜くとキスをしたまま、百合子を抱きかかえてベッドの上におろした。閉じたままの百合子の白い両足を、さね子は素早く大きく開かせた。その上にさね子は乗ると、又アンダーヘアを合わせた。今度はさね子の女性器が百合子のものに当たった。ふたつの陰唇が合わさると、さね子は激しく男性のように腰を振り始めた。ぐによぐによと割れ目の擦れる音がし始める。百合子の頭の中は透明になっていった。さね子は百合子の両方の乳首を一つずつ、口に含むと舌で愛撫する。百合子は自分の乳首が硬くなっていくのを感じた。次に、さね子の舌は百合子の首筋、耳を舐めまわす。百合子は自分の股間が、じっ

とりとするのを覚えた。さね子の腰の動きが早まりだした。

さね子は、

「百合子、もうわたしイキそうだわ。ああっ、出る！！！」

さね子は、びゅっと出した潮を百合子の柔らかな淫唇にかけてグツタリとした。百合子は自分のアソコが師範の出した液体で濡れたのを感じた。百合子も何か、イクという感覚を覚えたような気がした。

さね子はすぐに立ち上がると、バッグを置いてあるサイドテーブルのところに行き、バッグの中から何かを取り出した。ベッドに白いふっくらとした足を大きく広げて寝ている姿勢から、百合子が見たものは天狗のお面を手に持つ女師範の姿だった。さね子はその天狗の高い鼻のお面から出ている紐で、自分の腰に巻きつけるとそれは師範が勃起し

たイチモツを現したようだった。その鼻は、さね子の腹部から四十五度の角度をもって上に跳ね上がっていた。（師範、まさかそれで・・・）百合子が思う間もなく、さね子はベッドに戻ると百合子の上に覆いかぶさって、天狗の長い太い鼻を百合子の若いおまんこの中に挿入していった。

（ああんっ）百合子は、かすかな痛みと強い快感を挿入の瞬間に覚えた。さね子は天狗の鼻を根元まで百合子のかわいいマンコに入れ終わると最初はゆっくりと、やがて激しく腰を振り始めた。百合子は小さな声で、

「ああんっ。」

とかわいい悶え声を洩らした。さね子は腰を目まぐるしく動かしながら、百合子に顔をくっつけてくちびるを合わせた。天狗の鼻は硬いゴムのようなもので、できていた。さね子は律動を早めていくと、

「ううっ、又、イクわっ。」

そう叫ぶと、ぐったりとなった。天狗の面の中に潮を出したのだ。百合子もその時は、失神しそうな状態になっていた。

やがて身を起こすと、さね子は天狗の面を外して、

「これで百合子も女になったのよ。わたしを女にしたのは父。でも父が自分のものを娘のわたしに入れるわけではないわ。父は自分の体にわたしが今、あなたにしたように天狗のお面をつけてわたしに挿入したの。それは、わたしがやはり貴女と同じように十八の夏だったわ。」

ベッドに腰掛けて、遠い日を思い出すような眼をしながら女師範はそう語った。

(えええっ)と百合子が思うと、さね子は苦笑いして、

「でも父は変態じゃないのよ。わたしに空手の秘儀を教え

るためだったの。そのためにわたしの女性器を打ち破った
のよ。それからわたしの修行はまた、始まったのね。」

さね子は又、バッグのところへ行き、天狗の面をしまおうと
又、中から何か取り出した。今度は黄色いバナナだった。

まあ、赤いバナナがあるわけもないけれど。女師範は、バ
ナナを立ったまま皮をむきベッドに戻って腰掛けた。百合
子も起き上がってベッドに座った。立膝をして手を膝に置
いている。

さね子は柔らかな感じで足を開くと、手に持ったむいたバ
ナナを自分のマンコに入れていった。あ、と息を吞んで百
合子が見ていると、さね子は、

「うむっ。」

と小さく声を出した。右手のバナナを上にはげると、その
バナナは半分に切れていた。半分は女師範のマンコの中に

入っている。百合子が仰天すると、さね子は、

「これが秘儀、マンコ割りなのよ。最初はバナナなんかの
柔らかいもので、練習するの。」

と落ち着いて説明した。

それから再び、さね子はバッグのところに戻り中からキュウリを取り出して百合子を見ると、

「見てて、これを割る。」

直立しているさね子は脚を広げると、右手でキュウリを自分のまんこの中に入れた。

「はっ！」

と気合をかけると、キュウリはペキンと折れて彼女はそれを右手で高く上げてみせる。

「これくらいできるようになれば、マンコ割りは完成半ば
ってところかな。」

「すごいですね、わたしも練習すればできるようになりますか。」

百合子が賛嘆の面持ちで聞くと、

「ええ、もちろんだわ。あとで男を相手に実演してみせるわね。大橋駅近辺にもナンパ野郎はいるから。」

「わたしも、ナンパ男を相手にするんですか。」

「いえ、あなたはまだいいわ。マンコ割りで男がどうなるか、見てみることね。」

「ええ、見たいです。」

「これは一つの秘儀だから、最終的にそういう状況になった時に使うものなの。指で男のちんこを掴めれば、わたしならね・・・。」

全裸のさね子は、バッグの中から財布を取り出すと百円玉を右手の親指と人差し指でつまんだ。

「エイヤーっ!」

すると百円玉は少し曲がってしまった。又しても啞然とする百合子だった。

(あれじゃ、男の子のものは・・・)

百合子は、まだ見た事のない男のちんこを想像していた。

さね子は百円玉を財布にしまいながら、父以外の初体験の相手を思い出していた。

それは六月さね子が二十歳の歳で、彼女が昼間はコンビニでアルバイトしていた時の店長だった。